

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第925号 平成27年5月7日

あなたの子どもは

児童への虐待は、年々深刻さを増しており、厚生労働省の調査によると、平成25年度、全国の児童相談所での児童虐待に関する相談対応件数は73,802件と、7万件を超えてしまいました。

児童虐待防止法が施行される前の平成11年度が11,631件でしたから、この10数年の間に6倍以上になってしまいました。しかも、幼い子どもが実の親の手によって理不尽にも命を奪われるという悲惨な事件も後を絶ちません。

私が仕事をしている北海道社会福祉事業団でも、児童相談所からの依頼を受け、親から虐待を受けている子ども達を受け入れていますので、他人ごとではありません。当事業団の施設に入る子は何らかの障がいを持っていますので、その子達は、自身の障がいに加え親からの虐待という二重のハンデを背負っている事になります。

私は、彼らが背負っている過酷な運命を呪いますし、少なくとも、当事業団の施設にある間は、我々としてなし得る事を精一杯、愛情を持ってしてあげたいと思っています。

親が何故実の子を虐待するのか、そこには、虐待をしている親が実はその親から虐待されていたという虐待の連鎖、更には、夫婦間の確執や貧困の問題等様々な要因が考えられますが、私には、我が子をあたかも自分の所有物のように扱ってしまっているところに、大きな問題があると思っています。

アメリカの詩人で画家でもあるカリール・ジブラン氏(1883年~1931年)の詩に「子どもについて」という作品(船井幸雄訳「預言者」から)があります。

その詩は「あなた達の子はあなた達の子ではない。」という一節から始まり、次の様に続きます。

「大いなる生命が自分自身に憧れる、その憧れの息子であり、娘たちだ。

あなた達を通して生まれてくるが、あなた達から生まれてくるのではない。

あなた達とともにいるが、あなた達のものではない。

子どもに愛をあたえることはできても、考えまであたえることはできない。

子どもには子どもの考えがある。(以下略)」

私達は、しばしば「子どもを授かる」という表現を使いますが、どうもそれは正しくないように思います。本当は、「子どもは天からの預かりもの」と考えるべきな

のではないのでしょうか。

私達は、誰一人生まれて来る子を選ぶ事は出来ません。皆、子ども達によって選ばれ、天から健やかに育てるよう託されたのだと思います。

勿論、子育ては決して楽なものではありません。特に、母親は大変だと思います。でも、その大変さは、やがて喜びに代わる時が必ず来るはずです。

親が子を虐待するというのは、その喜びの種を自ら放棄するようなものです。

上述のジブラン氏の「子どもについて」という詩には続きがあります。

「あなた達は弓だ。子どもはその弓から、生きた矢として放たれる。

射手は、無限に続く道の先に狙いを定め、矢を早く、遠くへと飛ばそうと、大いなる力であなた達をたわめる。

大いなる射手の手のなかでたわめられている、そのことを喜びとしよう。

飛んでいく矢が愛されているのと同じように、手もとに残る弓もまた、愛されているのだから。」

自分達は今子育てに苦労しているとしても、それは、子ども達が広い世界に飛び出せるように天の力によって「たわめられている」のであり、それを私達は喜びとし、楽しみとする事が大切だ。何故なら、慈しみ、育てている我が子と同様に自分もまた天から愛されているのだから、というのがジブラン氏からのメッセージです。

私にとっては、ジブラン氏のメッセージが届くのが遅過ぎたように感じています。もっと早く私の元に届いていたら、子どもにとってもっと良い父親になれたらろうにと、今更ながら反省しています。

「ごんぎつね」の著者として有名な新美南吉氏の詩に、「天国」というのがあります。

その詩の中に

「子ども達は

おかあさんの背中を

ほんとうの天国だとおもっていました。

おかあさんたちは

みんな一つの、天国をもっています。」

という一節があります。

親から虐待を受け、幼い命を失ってしまった子ども達にとっては、母親の背中が天国とはなりません。せめて、あの世では、安心して眠る事の出来る背中が見つかるようにと祈るばかりです。

(塾頭：吉田 洋一)